

舞鶴市糸井文庫蔵『水江浦島 対紫雲篋』翻刻・語釈・抄訳および英訳

畠 恵里子¹・荒川 吉孝²・西野 由紀³・小室 智子⁴・吉野 健一⁵

要旨：本稿は、舞鶴市が所蔵している糸井文庫の『水江浦島 対紫雲篋』を対象として、翻刻・語釈・抄訳・英訳を付し、国内外の研究者に資するようにした試案である。

キーワード：糸井文庫、浦島伝説、黒本、青本

1. はじめに

舞鶴市糸井文庫蔵『水江浦島 対紫雲篋』（上巻・中巻・下巻）を取り上げ、翻刻に加え、語釈・抄訳・英訳を施した試みである。基礎的翻刻を小室・吉野が、近世文化を踏まえた翻刻の再検討・語釈を西野が、抄訳を畠が、英訳を荒川が担当した。

2. 翻刻・語釈

「凡例」

- ・ 翻刻にあたり、かな遣いは原則として原文にしたがい、句読点および濁音・半濁音については適宜ほどこした。
- ・ ふりがなについてはそれぞれ語の直後の（）内に記した。
- ・ 原文に促音・拗音がある場合はすべて小さく表記した。
- ・ 原文が漢字表記の場合であつてもひらがなに改めたものがある。また、原文がひらがな表記の場合であつても漢字に改めたものもある。なお、漢字表記に改めたもののうち、必要であると判断した語には原文の表記にしたがいふりがなを付した。
- ・ 漢字の字体や送りがなの用法は、こんにちの一般的なものにできるかぎり近づけた。
- ・ 左記の文字は原則としてそれぞれひらがなで記した。

八→は 三→み 川→つ

- ・ 繰り返しをしめす踊り字はそれぞれもとの字に置き換えた。
- ・ 改行やカギ括弧は適宜ほどこした。
- ・ 文字の判読が不可能な箇所は□で示した。
- ・ 底本は舞鶴市糸井文庫蔵本を使用した。なお、立命館大学アート・リサーチセンターが公開している「ARCプロジェクト公開データベース」内「舞鶴市糸井文庫閲覧システム」の画像データもあわせて参照した。
- ・ 語釈については基本的に『日本国語大辞典』『大辞泉』を参考した。この二書で不十分な語については適宜、『日本古典文学大辞典』『国史大辞典』『日本歴史地名大系』『国書人名辞典』『日本大百科全書』を参考した。
- ・ それぞれの用例から、おもに一五世紀以降にみられる語を取り上げた。それ以前に用例がある場合も、本文中で使用されている語義においてあてはまるものはこれに含めた。

1 舞鶴工業高等専門学校 人文科学部門 准教授
 2 舞鶴工業高等専門学校 人文科学部門 教授
 3 天理大学 文学部 准教授
 4 舞鶴市郷土資料館 学芸員
 5 京都府立丹後郷土資料館 学芸員

●上巻

(一丁表)

丹後国竹野社は、世の人斎（いつき）の社（やしろ）といふは、斎の女子あればなり。この神の奇妙は、願主大願の祈ればたちまち神殿鳴動して、宮中の神矢ことごとく飛び出づる。これを願成就とせり。その後社人、卑賤を集めてまた宮中に納む。この宮の斎は、その氏族当国市場村にあり。今上、幸い幸いと敬つて申す。帰命頂礼帰命頂礼。

【語釈】 ○竹野社 丹後国竹野郡にあり、現在の京都府京丹後市丹後町宮にあら竹野（たか・の）神社（祭神は天照大神）をさす。「延喜式」神名帳には竹野郡「竹野神社大」とある。本殿横に境内摂社の斎宮神社（祭神は日坐王命・建豊波豆良和氣命・竹野媛命）があることから、斎宮とも呼ばれる。江戸時代にはとくに漁師らから丹後の明神として崇信されたという。○市場村 丹後国熊野郡にあり、現在の京都府京丹後市久美浜町市場をさす。『神社啓蒙』卷之六には「齋（イツキノ）宮ト号スル者（ハ）熊野郡市場村ニ斎宦之人有。女子ヲ生則飛箭必于屋上立也。其子四五歳之（ノ）時當宮ニ奉呼（ヨンデ）齋（イツキ）女ト為也。」と記されている。

(一丁裏)

市場村の女、子を生ずれば、その子、斎にならんとては、この宮の飛箭（ひ・せん）かならずその家の屋根の上に立つなり。これを名づけて斎姫（いつき・ひめ）といふ。

「今時の娘には油断がならぬ。あの男にちぶくりたがる目つきぞ。合点か。」「しかたない男だ。沢村訥子（さわ・むら・とう・し）が若盛りときていてる。」「これこれ、あつぶてきな仕打ちをせまい。その娘は神のものだぞ。ふさぶきしい。」

【語釈】 ○飛箭 飛んでくる矢のこと。飛矢。○ちぶくり 「乳含（ち・ぶ

く）る」とは、乳房をふくむこと、また、乳臭くあまること。○沢村訥子歌舞伎役者である沢村宗十郎（さわ・むら・そう・じゅう・ろう）（元禄二年（一六八九）～宝暦六年（一七五六））のこと。初代宗十郎の俳名が訥子である。享保二年（一七一七）に大坂で初舞台を踏むも、翌年以後は江戸を中心に行き、元文（一七三六）以降は江戸の大立者となる。○あつぶてき 厚

くてぼつたりとしているさま。厚ぼつたい。『俚言集覽』上巻には「厚太きの義なり。アツボツタイとおなじ」と記されている。○ふさぶさしい 大袈裟である。仰々しい。「ふさふさしい」ともいう。

(二丁表)

同国与謝の郡（こほり）に水江浦島といふ者あり。極めて美男なり。斎姫、十二、三才の頃より浦島を見初めしが、その内に斎に立ちて、その念を忘る。「さてもさても、可愛らしい殿御かな。わしや斎に立つことは嫌になつた。」「これ娘子、空ゆく月の巡り会ふまでじや。さらば。」

ちぢんちり、とつてんれいれい、つれつてちんりんりん。

【語釈】 ○与謝の郡 丹波国の郡の一つで、現在は京都府与謝郡。与謝郡は丹後半島の南部、竹野神社のある竹野郡は北部、市場村のある熊野郡は半島のつけ根の内陸にあり、それぞれがほぼ正三角形状に三〇キロメートルほど離れている。○空ゆく月のめぐりあふまで『伊勢物語』十一段「空ゆく月」の和歌「忘るなよほどは雲居（ゐ）になりぬとも 空ゆく月のめぐりあふまで」をふまえており、この歌は『拾遺和歌集』雜上、『拾遺抄』雜下にも入集している。『拾遺和歌集』の詞書には「橘（たちばな）の忠幹（ただ・もと）が、人のむすめに忍びて物いひ侍りけるころ、遠きところにまかり侍るとて、この女にいひつかはしける」とある。

(二丁裏)

浦島が世渡る営みは漁師にて、網をひき、釣りを垂れたり。美男なれば、その辺の海女、乙女、この男を慕いてほのめくこと、網の目から手を出すがごとし。それゆへに近辺の男は憎めり。

「これ、ここな性悪め。わしが知るまいと思ふてか。タベも揚船（あげ・ふね）の陰で見たぞや見たぞや。」「こなんは昨日の晩更（ばん・かふ）、わしをぬっぺり騙しやつたの、憎らしひ。」

【語釈】 ○ほのめく 女性がやさしい声で言う。○網の目から手 方々から手を出すこと。求める人、望み手が多いこと。引く手あまた。○揚船 浜辺などに引き揚げた船のこと。○こなん 「こなさん（此方様）」の変化した

語。女性が軽い敬意をもつて相手を呼ぶときにもちいる語で、本来は遊里での遊女のことばであったのが、後に男性ももちいるようになった。○ぬつぱり何くわぬ顔をしたり、口先だけで相手を騙そうとしたりするさまをあらわす語。ぬけぬけ。

(三丁表)

浦島が兄、水江兵衛といふ男は、不器量(ぶ・き・りやう)にて、女に嫌はれしかば、弟浦島をことさら憎みて、炎(ほむら)をわかす。

「さてもこなさんは、よふ絵がつくわいの。」

「したがこなさんは色が取れまいが、太郎さんはたんと名がつくわいな。」「弟(おとと)めがふてぶてしい。ませた仕打ちじや。そして、あいつが舞台顔といふ身を広ぐで、なを俺が売れにくひ。嫌らしい奴じや。」

【語釈】○不器量 容姿が醜いこと。○こなさん 「こなん」に同じ。○

受けの意としてもちいられる語。めくりカルタで高点の絵札が手にはいるところから転じたもの。○わいの 終助詞「わい」に間投助詞「な」のついた「わいな」が変化したもの。詠嘆をこめての確認を、軽くやわらかに聞き手にもちかけるのにもちいる。○したが であるが。だが。けれども。「そうしたが」の略。○ふてぶてしい ひらき直って図太くかまえているさま。大胆不敵なようす。○仕打ち 他者に接するときの態度やふるまい。多くは悪い意味にもちいる。○舞台顔 舞台で演技をするためにつくった顔だち。ここでは太郎が「極めて美男」であることを表現している。○広ぐ しょる。「する」 「おこなう」の意で、相手を罵つていうことば。しやがる。しょる。○嫌ら しい 感じが悪い。不機嫌な気持ちにさせる。

(三丁裏)

斎姫成人して月の経水(けい・すい)を覚ゆれば、山に出しておく時、いづくともなく大蛇出でて、眼をいからし、かの姫を憎む。ここにおよびて、神へ訴へをとげて、里へ下るといふこと、『神社啓蒙』に見へたり。山中に一人なりとも、猪、狼に恐ることなし。これ神変(じん・べん)なり。また獸(けだもの)も恐れて寄りつかず。

【語釈】○經水 月經。月のさわり。○神社啓蒙 江戸時代前期の国学者で、神儒一致をとなえた白井宗因による神社総覧の書。寛文十年(一六七〇)刊。なお、同書卷之六には「斎(イツキノ)宮ト号スル者(ハ)熊野郡市場村ニ斎宦之人有。女子ヲ生則飛箭必于屋上立也。其子四五歳之(ノ)時當宮ニ奉呼(ヨンデ)斎(イツキ)女ト為也。山中深林之中ニ干獨禽獸ト同居スレドモ敢テ畏怖無。若シ長に及テ天癸至リ或ハ交接ノ之情生キハ則大蛇出現シテ虺虺シテ眼ヲ瞋ス。是ノ時ニ及宦ヲ致テ郷里還。」と記されており、『対紫雲篋』の一丁表および裏の文章もまた同書に依拠していることがわかる。

(四丁表)

総じて斎を神に献ずること、伊勢・賀茂両社にあり。この社の斎は皇女にあらずして、その氏族、前に述ぶるなり。たとへて言はば、鹿島の御物忌(お・もの・いみ)といふに似たり。成人、神の妃(きさき)に備ゆるといふは誤りなり。畢竟、斎は内裏より伊勢・賀茂へ献ぜらるるに準じて、この神にもありと見へたり。また飛箭の奇瑞はみな神力(しん・りき)の為すところなりとぞ。

【語釈】○鹿島の御物忌 茨城県の鹿島神宮に明治維新前まで置かれた女性の神官。鹿島斎ともいい、神の御杖代(み・つえ・しろ)として仕える。これに定まると一生涯嫁することなく務めた。

(四丁裏)

斎姫、障(さわ)りになりて里へ下がりければ、その父母、他へ嫁せんとするに、姫望みて浦島太郎と夫婦となる。しかるに、兄水江殿ならず。弟嫁に無体の恋慕、知つたる姫はつねにしやく支へありて、薬を飲む。

「ああ申し、けふとい、離さんせ。人が見るわいな。」「弟めは舞台顔が良いから、我等を嫌い給ふか。そりや胴欲(どう・よく)、ちくとんばかり、なびきなさい。ここな命取りめ、どうだどうだ。」「あれ、悪いことばっかり。」「これはけしからぬことじや。」

【語釈】○無体 とりわけはなはだしのさま。むやみ。○けふとい 古くは「氣疎(け・うと)し」と発音された語が近世初期に「けうとい」と変化した語。「きようとい」とも。嫌である。○しやく支へ 「癪」は胸部または腹

部におこる一種のけいれん痛のことで、「支へ」は胸がつまるように苦しいこと。ここでは胸の痛みをともなう病をさす。○胴欲 人情に反する非道なこと、また、そのさま。無慈悲。○ちくとんばかり 「ちくとばかり」の変化した語。すこしばかり。ちょっとばかり。○ここな (「ここ」(此処)なる) の変化した語) 人や物を罵つていうとき、その人や物をさし、罵りの意を強めいう語。この。○命取り 生命、地位、財産、名譽などを失う原因となるものやことがら。美女をいうのにももちいた。「ここな」が人や物を罵るときにもちいられることから、斎姫を美女とみなしてこう呼んでいる。○ばつかり 副助詞「ばかり」の変化した語。限定の意をあらわす。だけ。促音になるのは「ばかり」のうち限定の意をあらわす場合のみで、一五世紀頃からもちいられた。

(五丁表)

浦島、姫とは偕老同穴(かい・らう・どう・けつ)の語らひ深くなり、明けに一面の鏡を浦島に与へる。そもそもこの鏡はもたし、寸毫(すん・がう)の海上より出でし、水心鏡と申す鏡なり。
 「この鏡の徳は、日照りに雨を祈れば雨を降らし、すなどりは釣りを垂れ、網を下ろすに、漁あることおびただし。もし我が者に先立たば、形見と思ひ給へとて与ゆる。」
 「この鏡はそんな我等に痛事(いた・ごと)か。かたじけないかたじけない。御札にはまづ寝ましよ、やふかうじ。」

【語釈】○偕老同穴 夫婦が長生きをし、死後も同じ墓に葬られる意で、夫婦の契りの固いこと、むつまじく幸福な理想の結婚生活をいう。○もたし 「もたせ」か。持たせた物の意。贈り物、持ってきた物。手土産。○寸毫 きわめてわずかなこと。○水心鏡 「水心」が水泳の心得、泳ぎのたしなみをさすことから、雨乞いだけでなく、海で漁をするときにも効果があるとしてこの名とするか。○すなどり 魚介などをとることを業とする人。漁夫。漁師。○痛事 非常につらく、困ったこと。

(五丁裏)

水江は、我が恋叶へぬのみか、どうしたことやら弟よりも漁の少ないこと、かたがた姫を憎み、支への薬に毒を入れおく。姫はかくとは知らず、毒を飲みて、

ついに傍くなりにけり。
 「わしや殺されたわいな。」「なふなんとしやつた。夕飯(ゆふ・めし)の際の竹の子があつたか。これさこれさ、エエ悲しや。」「弟めがこれですこしは照れがきましょ。何でもあだめはよい気味してこましめた。アア舌があつたら物じや。」

【語釈】○なふ 感動詞「なう」の変化した語。感情の高ぶつた時に発するごとば。ああ。○これさ 「此様・是様(これ・さま)」の変化した語。こなたさま。あなたさま。○照れ 間の悪い思いをすること。きまりの悪い思いをすること。○あだめ よその人の目。よそめ。○こました ある動作をしようとする自分の意思をあらわす。うしてやる。やつてやる。

●中巻 (一丁表)

浦島太郎、妻に後れて漁せんも、しばらく休みしが、かくてもおられず、海に浮かみて釣りをするに、いつに変わりて魚一つも上らず、やうやう小さき龜一匹釣り上たり。龜は万年の齢(よはひ)あると聞けば、不憫なりとて、また海へ放す。万年といふにつれて、妻恋しく思い出し、懐中より鏡を取り出し、妻と思ひて眺め、取り外して鏡を海へ落とす。
 「この鏡を見るにつけても、女房がこと思ひ出す。□□いやいや。」

【語釈】○亀は万年の齢 亀が長寿であること。また、亀にあやかつて長寿を祝うことば。

(一丁裏)

浦島、詮方なく、ついその夜は舟中に伏して寝入りける。しかるに、子(ね)の刻と思ふ折から、不思議やいづくともなく二八ばかりの女、舟中に現れ、浦島をほとほと叩いて起こす。目覚めて見れば、この世を去りし女房にそのままの女なり。

「申し申し浦島さん、起きさんせ。大切な用がござんす。」「これはしたり。かふ寝さんしたほどにの。」

【語釈】○折から ちょうどその時。おりしも。ちょうど。○一八 掛算で十六となることから、十六歳か。○申し申し 感動詞「もうし（申）」を重ねた語。もしもし。○さんせ 「しゃます」の変化した語である「しゃんす」が音便化したもの。尊敬の意をあらわす。上方地域を中心に、遊里的女性がもっていた。○ござんす 「ござります」の変化した語。発生当初は遊女のことばであったが、元禄（一六八八～一七〇四）頃には若い一般女性間にも流行し、近世後期では男性ももちいるようになつた。○したり （動詞「する」の連用形に助動詞「たり」がついてできた語）失敗した時に発する語。上に「これは」がつくことが多い。しまつた。しなしたり。○さんした 「さんせ」に同じ。

(二丁表)

「そもそも御身は誰なるぞ。」

〔御心の内、痛ましさに参りたり。何を隠し申さん。我は昼助け給ふ龜なり。願はくは、我住む方へ誘（いざな）い申さん。〕といふ。浦島何の気もつかず、ただ妻と思ひてその夜は筈を敷き寝に舵を枕にして、潮風にて契りを籠むる。
「今から心変はらぬやうに頼みんす。」
「てんと美しいの。寝ときたは、弁財天ははだしはだし。」

【語釈】○痛ましさ (形容詞「いたましい」の語幹に接尾語「さ」のついたもの) 相手を哀れみ、同情して、心が痛むこと。また、その度合。○敷き寝ござなどを下に敷いて寝ること。また、その敷き物や寝床。○契りを籠む 夫婦の交わりを結ぶ。○みんす 「さんせ」に同じ。○てんと すっかりそこの状態であるさま、疑問に思う余地のないさまなどをあらわす語。まつたく。十分に。ほんとうに。

(二丁裏)

その夜半ば過ぎて、五更の鐘とともに、浦島を伴ひ、海中に入りて、そこはかとなく見わたせば、海満々（かい・まん・まん）といさぎよし。それ天地の立つところ、水を以てはじめとす。「天の一水を生ずる」といふはこれなり。

「あの高ひ屋根は何でござるぞ。国性爺（こく・せん・や）の道具立てを見るやうな。後は引つ返しかせり出しか。」「あれは龍宮の洞門（どう・もん）、龍（たつ）の都じやわいな。」夢とも現（うつつ）ともなく、辿りて行かば、さまざまの鱗（うろくず）、こかしこに現れ、その丈（たけ）廿丈もあり。三階の楼門の額に「龍宮」と記せり。その辺（ほとり）に大魚（うを）なみいて、乙姫を迎ひする。駱賓王（らく・ひん・のう）「陀山寺（だ・さん・じ）に遊ぶ」詩に曰く、「葉曙龍宮密（よう・くらし・りう・ぐう・みつなり）」。

【語釈】○満々 みちみちているさま。みちあふれているさま。○ござる（「ござる」の変化した語）「ある」「いる」の丁寧語。○国性爺 近松門左衛門の淨瑠璃「国性爺合戦」（正徳五年（一七一五）大坂竹本座初演）のこと。享保元年（一七一六）には歌舞伎にも取り入れられた。内容は、中国明代末の鄭成功（てい・せい・こう）の史実にもとづき、日本に亡命の鄭芝龍の子和藤内（国性爺）が義姉錦祥女の夫甘輝と協力して明朝の再興を図る筋。○道具立て 必要な道具を整えておくこと。また、その道具。○引つ返し（ひきかえし（引返））の変化した語）歌舞伎で、一度幕を引いて、下座（げ・ざ）音楽や拍子木でつないでおいて、急いでまたあける、場面の転換方法。ひとつかえしまく。○せり出し 劇場で、俳優や大道具を、奈落から舞台、または花道へ押しあげ出すこと。また、その装置。せりあげ。○夢とも現とも（「夢か現か」に同じ）夢の中でのことなのか、それとも現実に起つたことなのか。多く、意外なことの出現に、それを半ば疑う気持でいるさまをいう。○鱗（うお）の総称。○駱賓王「陀山寺に遊ぶ」詩「駱賓王」は七世紀の唐の詩人。「陀山寺に遊ぶ」詩とは「和王記室從趙王春日遊陀山寺」のこと。「鳥旗陪訪道、鷲嶺狎棲真。四禪明靜業、三空廣勝因。祥河疎疊澗、慧日皎重輪。葉暗龍宮密、花明鹿苑春。彫談筌奧旨、妙辯漱玄津。雅曲終難和、徒自奏巴人。」

(三丁表)

「見慣れぬ男が、こちのお娘子を、道々くるめかける。何をあやなしあるやら。太ひ奴だ。」「あの男は市川高麗（こ・ま）蔵が振りを見習ふた奴だ。声色（こは・いろ）使いそふな。」

【語訳】 ○こち 自分の家。また、その家にいっしょに住むもの。 ○お娘子 「むすめ（娘）」に同じ。接頭語「お」がつく用例は近世期のみで、古くはたんに娘とする。 ○くるめかける 巧みなことばでまるめこむ。あざむきかけ。 ○あやなす 巧みにあつかう。うまくあしらう。まるめこむ。あやつる。 ○太ひ ずうずうしい。ずぶとくふてぶてしい。ふらちだ。 ○市川高麗藏 松本幸四郎（初世）のこと。元禄（一六八八～一七〇四）のはじめ江戸に出て歌舞伎役者となり享保元年（一七一六）より松本幸四郎を名乗る。二世市川団十郎とならぶ江戸の名優とされた。 ○声色 他人の声や動物の鳴き声をまねすこと。多くは俳優、有名人などの声や口調を模写する場合にもちいられる。元禄期の歌舞伎興隆につれて流行し、木戸芸者、吉原の帮間（ほう・かん）、寄席（よ・せ）芸人などから専門家が出た。声帶模写。

(三丁裏) 「恥づかしや、自らはこの海（かい）の娘乙姫なり。御身の美男になづみて亀と化（け）してわざと釣り上げられたり。しかるを助け給ふ心ざしを察して、かくは計らひしなり。この上は長くこの海に留まり、自らと末の松山浪は越させじ。幾万年も契り給へ。」

「数ならぬわたくし、体品の悪い儀は御免御免。」

「さてさて、結構なところを拝見仕り、ありがた山じやない海とはこれであるふ。」

八大龍王、娘乙姫の婿なれば、このうへもなくもてなし、山海の珍物（ちんぶつ）さらなり。そのおもしろき栄華身にあまり、まことや聞きおよぶ出興の都、喜見城の楽しみもかくやあらんと、姫の気に入りにけり。

【語訳】 ○乙姫 海底の龍宮に住むという伝説上の美しい姫。 ○なづむ ひたむきに思いを寄せる。執心する。惚れる。 ○末の松山 陸奥国にあった地名。歌枕。宮城県多賀城市八幡の宝国寺背後の丘陵地の呼称とも、岩手県二戸郡一戸町と二戸市との境にある浪打崎のことともいわれる。ここでは『後拾遺和歌集』の「契りきなかたみに袖をしづらつすゑの松山浪こさじとは（清原元輔）」をふまえるか。 ○御免 謝罪、ことわりなどをいうときに発する語。 ○ありがた山 「ありがたい」の意をしやれていう語。意味のない「山」を添えていうしやれの一つで、近世期、おもに江戸でもちいられた。 ○このうへもなく これよりもさるものはない。これ以上のことはない。最上である。こよなし。 ○山海の珍物 山や海からとれる珍しい産物。また、それらの御馳走。 ○栄華 派手な生活。ぜいたく。 ○喜見城 （帝釈天の居城をさす仏語から転じて）近世期には、このうえもなく楽しい場所をさすようになる。花街をいう場合が多い。

(四丁表) 「これは迷惑。俺を茹でんとはあんまりなことだ。」

「いかに稀（まれ）人、近ふ近ふ。ほかに馳走はござらぬ。魚のあたたしいばかり。もの言ふタコを茹でて進ぜる。腹藏なしに姫と契り給へ。」

【語訳】 ○迷惑 ある行為によって、負担を感じ、不快になること。また、そのまま。 ○稀人（まれ・ひと） 「まろうど（客）」に同じ。また、「まれびと」ともいい、近世期の用例は「ちらが多い。「まれびと」の場合は「稀者（まれ・もの）」に同じ。たぐいまれな人、傑出した人の意となる。 ○馳走（用意のためにかけまわる意から）心をこめたもてなし。とくに、食事のもてなしをすること。饗應すること。あるじもうけ。接待。また、そのためのおいしい食物。りっぱな料理。御馳走。 ○あたたしい 程度がはなはだしい。 ○腹藏なし 「腹藏無い」に同じ。心に思つていることをつみ隠さない。心中にふくむところのない。

(四丁裏) ある日すぐれて天気快晴の昼、乙姫さきに立ち、浦島を伴ひ、水中より一つの島に上がり、さいつ差されつ献々の酒盛りし給ふ時、海中より何者か数十人出でて島に上がり、あるひは語りあるひは笑ふ。その言ふこと知れず。 「あいつはこの燶鍋（かん・なべ）の内が望みそふな、烏賊に鰯介、ふるまい給へ。」

「あの衆に飲ませますれば、なかなか七つ梅一樽では足りませぬ。これは大（だい）の痛事痛事。」

【語訳】 ○さいつ差されつ 「差しつ差されつ」の変化した語。他の人の杯に酒をさしたり、他の人にさしてもらつたり。盛んに杯をやりとりすること。 ○

献々 酒を何度もくみかわすこと。酒盛。また、婚姻の時の三三九度の杯。さかずきごと。○燭鍋 酒の燭をするのにもちいる鍋。多くは銅製で、つぎ口、ふたがあり、つるがついている。○なかなか (副詞「なかなか」から転じたもの) かんばしない面についての評価、あるいは皮肉まじりの評価を示す場合。○七つ梅 江戸時代、摂津国池田 (現在の大坂府池田市) で製造し、江戸の木綿屋が売り出したという銘酒の名。七つ梅は田沼意次・意知父子の紋所であり、その全盛にあやかつて名づけたという。

(五丁表)

かたちは全く人に変はることなく、ただあかはだかの身なり。酒を見ると腰をぬかし、何とやら飲みたそぶに近寄りければ、太郎心づきて皆々へ酒をふるまふ。限りなく悦び、この礼と多くて絹の様 (やう) の物を与ゆる。これ猩々紺 (せう・ぜう・ひ) ならめ。この者、海中に住む猩々とやいふべき。

「酒のさの字は些細のさの字、飲んで揺らるる由良之助。ちんはいはい酔ふたついない、三下りが聞きたい、糸に縫 (よ) る岡の柳の綱手なは、曳けや曳けや曳けや曳けやこの車。」

【語訳】○猩々紺 あざやかな深紅色。また、その色に染めた舶来の毛織物。陣羽織などにもちいられた。室町時代後期から江戸時代にかけて、おもにヨーロッパから輸入された毛織物、羅紗 (ら・しゃ) の色。それ以前にはない色名。○猩々 想像上の怪獣。猿に似て体は朱紅色の長毛でおおわれ、顔は人間に、声は小児の泣き声に似て、人語を解し酒を好むという。○些細 小さなこと。わずかなこと。たいしたことではないこと。また、そのようなさま。酒を「ささ」と呼ぶことから、その音から連想した表現。猩々のように大酒を飲んだあとで、それが些細な量であると言つていて滑稽さをあらわしている。○由良之助 浄瑠璃「仮名手本忠臣蔵」の登場人物、大星由良之助のこと。直前の「些細」と同じく、「揺れる」の音から連想した表現。○さん下り (三) の弦が下がった調弦の意) 三味線の調弦法の一つ。本調子の第三弦を一全音上げたもの。二上がりの第一弦を一全音上げて作ることもある。優美で沈んだ気分をあらわし、長唄、小唄に多くもちいられる。また、それによる節まわし。

●下巻
(二丁表)

【語訳】○籠甲屋 珊瑚 (たい・まい) の甲を細工し、その細工物を売買する店。また、その人。○磯端 磯のほとり。磯辺。海浜。海岸。○骨牌 獣骨などで作った麻雀用の牌。カルタ。○差し引き 増減すること。とくに、潮の満ち干や体温などが上下したりすること。

(二丁表)

『博物志』に曰く、天地四方みな海水相通ず、地はその中にあり、渤海の東幾万里ということを知らず、實に底なしの谷といふ尾閑は、そのまた下にありて、万千みなこれもきすといふ。『華嚴經』に曰く、大海の中にじんむよほうあり、よく注ぐところを選 (ゑら) むるゆへに増減なし及びしや。かへり龍宮の水湧

太郎、龍宮におることおよそ三年ばかりと思ひしが、ふるさと恋しく、「ひとまずまかりて、またもや参り候はん。」

と、しきりにいとまを請ふ。乙姫、名残を惜しみ、「またもやこの海 (かい) へ立ち帰らん。」

と請ひ給はらば、

「箱をかならず開けて見給ふな。」

と、二つの箱を与ゆる。封印のつかぬ家苞 (いへ・つと) なりといふ。

「これ、お姫殿。きつい名残の惜しみよふかな。出合ひ女の日暮方ときては、さりとはしつこい後家の惜しみやうかな。」

【語訳】○出合ひ女 出合宿で相手かまわず密会して売春する女。多くはそこの奉公人。○しつこい つきまとつてうるさい。煩わしい。また、執念深い。執拗である。

(一丁裏)

浦島太郎いとまを請ひ、二つの箱を背負ひ、大きなる亀に乗りて、また大海 (かい) を過ぎて、刹那がうちにこの界へ戻る。道すがら海 (うみ) を眺むる。「おぬしが背中を籠甲屋に見せたらば、よいことがあるに。」
「滅多に磯端 (いそ・ばた) へ行かれませぬ。この前、わたしが仲間が、猿めに骨牌 (こつ・ぱい) にされました。」

大海の底に尾閑 (び・りよ) といふ穴あり。この穴に潮 (うしほ) の差し引き

ありといふ。

き出づるに時あり。このゆへに、潮（うしほ）時を失はず。朔日の朝は六つ四分に潮（しほ）さ□暮六つ時また同じ。二日は朝六つ八分、暮六つ同じ。朔日よりだんだん十五日まで四分づつにて知るべし。十五日より末十六日と朔日と同じ。世は皆、これに準ず。

(二丁裏)

そもそも浦島が龍宮へ行きしは、人王廿二代雄略天王の御宇なり。ふるさとへ帰りたるは五十三代淳和天王の御宇にして、その間およそ三百四十八年なり。ここに浦島が同村に、一人の姫あり。容顔麗しく淳和帝の御后に立たん前に、この竹野の社へ詣で給ふ。この御方を如意姫といふ。沢村国太郎といふ舞台顔、「てんとくるめかけたいが、こんな姿ではおちが来まいさ。それ、ともにほを掛けでみませふ。」

【語釈】○沢村国太郎 江戸時代中～後期の歌舞伎役者。色子、子役、若衆方を経て、宝暦四年（一七五四）、若女方に転じ、京坂の舞台で活躍。○くるめかけたい「くるめかける」に同じ。○おちが来まい「おちが来る」。見物人が拍手喝采する。拍手や笑いが起こる。○ほを掛け「ほをかける」。（「尻に帆をかける」の略）あわててげる。とつとと逃げ出す。

(三丁表)

太郎、昔の氏神へ参りしが、いとあでやかなる上臍（じやう・らう）の御顔を見申せば、昔の我が身にそのままなり。思わず御そばに寄りて、恋慕の兆しあり。姫も浦島が美男に見とれ給ふ。大仰（おお・ぎやう）と

【語釈】○上臍 女性、とくに若い女性を敬つていう。○染松七三郎 江戸時代中期の歌舞伎役者。享保四年（一七一九）、京都の早雲座に色子として出て、のち若女房となる。和事を得意として京坂で活躍した。○慰み（動詞）「なぐさむ（慰）」の運用形の名詞化）たのしみ。娯楽。

【語釈】○上臍 女性、とくに若い女性を敬つていう。○染松七三郎 江戸時代中期の歌舞伎役者。享保四年（一七一九）、京都の早雲座に色子として出て、のち若女房となる。和事を得意として京坂で活躍した。○慰み（動詞）（三丁裏）

姫、人をよけて、

「後に立たぬ身ならば御身と枕を交さんものを、重ねてのよすがを待ち給へ。」と妻櫛を与へ給ふ。浦島も同じ思ひにて、何がなと思へども何もなし。さいわい龍宮より貰ひし二つの箱の内、一つ印（しるし）のなきを姫に奉る。

「またの御見（けん）の印に、この箱を差し上げます。」

御かほひとに□□せ給と□□のと□□□いとしてわたくしが命でもさうしたい。」

【語釈】○御見（「ごげん」「ごけん」。「御見参」の略）お目にかかることを、主として女性、とくに遊女がいう語。御面会。ごげんもじ。ごけもじ。おめもじ。

(四丁表)

さるにても、浦島ふるさとに帰りて見るに、昔に変はりて知る人なし。あたりの家居（いへ・ゐ）も昔とは違ひければ、怪しみてその辺（へん）の老人に問ふ。翁答へて曰く

「我幼少の時、聞き伝えしことあり。昔このところに水江の浦島太郎といふ者ありしが、海（うみ）に遊びてついに帰らず。その間三百五十年ほどになる。」といふ。

「さてさて、てんこちない。話のあたまとはこのことだもさ。こなたは膏薬売りの身ぶりで何を言はしやる。」

【語釈】○てんこ（「てんこ」の変化した語）わるさ。ふざける」と。○膏薬売り 膏薬を売ること。また、それを業とする人。○しやる（尊敬の助動詞「す」の未然形に尊敬の助動詞「らる」の付いた「せらる」の変化した語）動作の主体（受身の場合は動作を受ける主体）に対する尊敬の意をあらわす。おくなざる。

(四丁裏)

浦島驚いて、

「さては蓬萊宮に似たるならん。」
再びあと人帰らんとするに、その道を知らず。茫然として、かの乙姫の与へし印（しるし）の箱を開き見れば、たちまち紫雲たなびく。その身、たちどころ

に極（ごく）老人皮骨（ひ・こつ）白髪となりて、まことに三百余歳の体（て）い）を現して、ついに倒れ、死せし時、淳和帝の御宇、天長元年のことなりとかや。

これはこれは。

【語釈】○茫然 気が抜けてぼんやりしているさま。 ○これはこれは 意外な出来事に対して、驚きや感嘆の気持をもつていう。

（五丁表）
御后のちに尼となつて、摂州如意が嶽に住み給ふ。時うつりて、空海と守敏（しゆ・びん）と雨の祈りを争ひしに、空海その利を得たることは、姫よりかの箱を得たるゆへなり。かの箱、紫雲篋（し・うん・きやう）とて、龍宮の宝器（ほうき）たるよし、『元亨釈書』に見へたり。『大織冠』にも龍宮のことありといへども、浦島ほどには詳しからず。このこと、『本朝怪談（ほん・てう・くわい・だん）』に見へたり。

【語釈】○本朝怪談 正徳六年（一七一六）刊の厚誉春鷲廊玄『本朝怪談故事』のこと。神仏の奸嬪・靈能・異色の御神体・祭礼などを記した説話集。

（五丁裏）

かかる不思議を目前に見ること前代未聞なりとて、浦島を神に祀りて、網野大明神はこの浦島のことなり。この神もやはり亀を愛す。神前の絵馬にも亀を描き上げて奉納すれば、諸願成就すと『諸社一覧』に見へたり。しかるをことわざに「浦島太郎が八千載」とは何を引きばつしていふこといや。とかく目出度、寿たるものと見へたり。案ずるに、八つは数の頂上なればなり。千載は御代を祝したことば、『式三番』にも出でたり。

鳥居清経画

【語釈】○網野大明神 丹後国竹野郡にあり、現在の京都府京丹後市網野町網野にある網野神社（水江日子坐主（みずの・えの・ひ・こ・いますの・みこ）・住吉大神（おお・かみ）・水江浦島子神（みずの・えの・うら・しま・この・かみ））をさす。「延喜式」神名帳に竹野郡「網野神社」とある。 ○諸社一

覧 貞享二年（一六八五）刊の『本朝諸社一覧』のこと。 ○式三番 歌舞伎の顔見世および正月興行に演じるもの。翁渡（おきな・わたし）。

3. 抄記

丹後国竹野社を斎の社と呼ぶのは、斎の女子がいるためである。この社の斎は、同じ丹後国の市場村から選ばれる。そこにうまれた女子の中で、竹野社から飛んできた矢が屋根の上に落ちた家の娘は、斎姫という。神のものとされる娘である。

さて、丹後国与謝郡に水江浦島という美男がいた。斎姫は十二、三歳の頃に浦島を見初め、斎に立ちたがらなくなつた。浦島は「しばらくのことだから」と言い残し、斎姫のもとから去つた。浦島は漁師であった。美男であつたので、近くに住む海女や女たちに大層もてた。そのため、他の男たちには「ぬけぬけとした性悪男」と言われた。浦島の兄で水江兵衛という男は醜男であつたため、弟の浦島をとりわけ憎んでいた。

斎姫とは、成人して月經がくるようになると里下がりすることになつていてと、『神社啓蒙』に記されている。山中で一人きりになつても、鹿や狼といった獣を恐れることなく、また、獣も斎姫を恐れてよりつかないのは、斎姫に神の加護があるためである。そもそも、斎を神へ捧げるというのは、伊勢神宮や賀茂神社では通例である。この社の斎は皇女ではないが、鹿島神宮に準ずるものである。件の斎姫も月經となり、実家へ下がつた。両親が他へ嫁がせようとしたところ、姫の希望によつて、浦島と夫婦になつた。浦島の兄の水江殿は姫へ恋慕し、口説き続けたが、姫は拒否し続けた。姫には持病があり、胸の痛みを取る薬を常用していた。

夫婦仲の深まつたある夜明けがた、姫は、海中から出たという水心鏡を懐中から取り出して、浦島へ贈つた。「この鏡は、日照りの際に祈れば恵みの雨が降り、海では豊漁となるという徳を持つています。もしわたくしが先立つようなことがあれば、これを形見としてください」と述べた。浦島は感謝した。

兄の水江殿は姫への想いが叶わず、水心鏡を持たないこともあって、弟の浦島よりも漁が少なかつた。その結果、姫を憎み、姫の薬に毒を仕込んだ。何も知らない姫は毒を飲んでしまい、急死した。

浦島は妻の死後、久しうぶりに漁をしたが、なぜかいつもとは異なり魚は一匹も釣れず、やつと小亀一匹だけを釣つた。「亀は万年の寿命」というため、かわいそうになり、海へ帰した。「万年」という言葉で妻を思い出し、形見の水

心鏡を取り出して眺め、そして「妻を思い出してつらいから」と海へ鏡を落とした。

浦島はその夜、舟中で眠った。子の刻（午前零時）頃、どこからともなく十六歳くらいの女が舟中に現れ、浦島を起こした。見ると、亡き妻に生き写しであった。「起きて下さい、大切な用事があるのです」と女は言つた。「あなたは誰ですか」との浦島の問いに、女は「あなたの心の痛ましさに参りました。実はわたくしは昼間に助けて頂いた亀です。どうぞ、わたくしの住み処へいらして下さい」といった。

その夜半過ぎ、五更（午前三～五時頃）の鐘と共に、女は浦島を連れて海中に入った。水は満々とし、龍宮の門、すなわち龍の都が見えた。夢現の心地で辿り着くと、多くの魚がおり、楼門の額に「龍宮」と記されていた。大魚が多く並び、乙姫を迎えた。「見慣れない男が、こちらのお嬢様を丸め込んだらしい」と海老が言い、「あの男は市川高麗藏のようなやつだ」と魚が言つた。

「ああ、恥ずかしい。わたくしは海の娘の乙姫です。あなたが美男なので、亀に化してわざと釣り上げられたのです。ずっとこの海に留まり、わたくしと添い遂げて下さい」と述べ、父の龍王へ引き合させた。八大龍王は、娘である乙姫の婿であるため、浦島を山海の珍物でもてなした。そこは、まるで帝釈天のいる喜見城のようなすばらしさであった。「おれをゆでるとはあんまりだ」と蛸が言つた。「どうぞ客人、近くにおいで下さい。魚がたくさんいるばかりで他に」馳走はないが、ものをいう蛸をゆでてお出しします。どうか姫とかたく結ばれて下さい」と、蛸以外のものが言つた。

後日、よく晴れたある日、乙姫が先導して、浦島を連れて水中から一つの島へあがつて酒盛りをした。その時、海中から何者かが数十人出てきて島にあがり、何やら話しあじめた。赤裸ではあつたが、姿形は全く人間と変わらなかつた。酒を見ると腰を抜かして、飲みたそうに近づいてきたので、浦島は皆へ酒を振る舞つた。すゑひの上なく喜び、上等な絹のような織物をお礼にくれた。

浦島は三年ほど龍宮にいたが、故郷が恋しく、「一度故郷へ帰つてまた海へ戻つてきたい」と強く願つた。乙姫は「再び海へ戻つて下さい」とせがみ、「絶対開けないで下さい」と言いながら一つの箱を与えた。浦島は、乙姫の振る舞いを、煩わしい後家のように感じた。

浦島は暇乞いをして二つの箱を背負い、大亀に乗つて一瞬のうちに故郷へ戻つた。『博物志』には「天地四方全てに海水は通じており、地上はの中にあります」などと説明がある。そもそも浦島が龍宮へ行つたのは、二十二代雄略天皇の御代である。現世へ戻つたのは五十三代淳和天皇の御代であり、三百四十八年が経過していた。

故郷に帰つた浦島は、昔の氏神へ参詣した際に出会つた昔の自分にそつくりの美しい女性、すなわち如意姫と恋におちた。姫も浦島が美男であるため見とれた。姫は「自分が后候補でなかつたならば、あなたと枕を交わしたいものを待つて下さい」と浦島に櫛を与えた。一方、浦島は、龍宮からもらつた二つの箱のうちの一つを如意姫に与えた。

さて、故郷は昔とはすっかり変わっていた。驚いて、あたりにいた老人に尋ねると、「以前、水江の浦島太郎という者がいたが、海に行つたまま戻らなかつたそうだ。三百五十年ほど前のことだ」と答えた。浦島は驚き、乙姫に事情を尋ねようと思ったものの、龍宮へ帰る道がわからない。為すべもなく乙姫から貰つた箱を開けてみたところ、たちまち紫の雲がたなびき、あつという間に老人となつて死んでしまつた。天長元年のことだという。

后となつた如意姫は、後に尼となつた。空海は、后が浦島から貰つた箱を得たらしく。これは紫雲篋という龍宮の宝物であつたと、『元亨釈書』に記されている。この不思議な出来事ゆえに、浦島を網野大明神として祀つたと、『諸社一覧』には記されています。

4. 英訳

MIZUNOE-NO-URASHIMA: TSUI-NO-TAMATEBAKO

Takano Shrine in the Province of Tango is also called the Shrine of Itsuki is selected from among those in Ichiba Village in the province. Among the because “itsuki”, or a shrine maiden, lives there. The maiden of the shrine girls in the village, one born in a house on whose roof the arrow shot from

Takano Shrine has fallen is called Itsuki-himé. She is regarded as the daughter of a god.

There once lived in Yosa County in the Province of Tango a handsome man whose name was Mizunoé-no-Urashima. Itsuki-himé fell in love with Urashima at first sight at the age of twelve or thirteen, and came to avoid being seen in public as a shrine maiden. Urashima took leave of her, saying, "I'll be back soon." He was a fisherman. Being handsome, he was very popular with women, particularly ama, or female divers, who lived close by. So he was called "a crafty rascal" by other men. He was hated especially by his elder brother named Miznoé-hyōé who was an ugly man.

As is written in *Jinja Keimo* [On Shinto Shrines], itsuki-himé in general retires from her office and returns home when she has her first period. It is because she is under divine protection that, alone in the mountain, she is not afraid of boar or wolves, nor do wild beasts dare come near her. It is a common practice at Isé Jingū [Isé Shrine] and at Kamo Ninja [Kamo Shrine] that they offer up itsuki to a deity. Though itsuki at Takano Shrine is not a princess, she is dedicated to a god according to customs at Kashima Jingū. The aforesaid Itsuki-himé also had her first period, and returned home. Her parents had intended to marry her off to someone else, but as she herself wished, she married Urashima. His elder brother loved her and wooed her, but she continually rejected him. She had a chronic chest illness, and regularly took medicine to relieve the pain it caused.

The conjugal affection deepened, when at the break of day she took out of her bosom a mirror called "shi-suri kyo" which had emerged from the sea. "This mirror has the virtue of bringing rain in answer to your prayers during drought, and can bring good fishing in the sea when necessary. If I should die before you, please keep this and use it if necessary," she said. Urashima thanked her.

Urashima's elder brother did not attain his desire. Besides, he made a poorer catch than Urashima in part because he did not possess the magic mirror. Thus he hated Itsuki-himé, and put poison in her medicine. She took it unknowingly, and died an untimely death.

After the death of his wife, Urashima fished for the first time in a long

time. Unusual as it was, however, he couldn't catch any fish but caught only a small turtle. Remembering the saying, "A turtle lives ten thousand years," he took pity on it and returned it to the sea. "Ten thousand years" reminded him of his wife. He took out the mirror that she had left and looked in it. He said, "It makes my heart ache to remember my wife." Then, he dropped the mirror into the sea.

That night, Urashima slept in his boat. At the hour of the Rat (about twelve o'clock midnight), a woman of about 16 appeared from nowhere and woke him up. She looked exactly like his deceased wife. "Wake up, please," she said. "I have something important to tell you." "Who are you?" asked Urashima. To this question she answered, "I have come because you are so sad. To tell the truth, I am the turtle that you saved today. Would you like to come with me to my abode?"

After midnight, as the bell tolled the fifth kō (from three to five in the morning), the woman took Urashima into the sea, which was at high tide. It was not long before he saw the gate of Ryūgū, or the Palace of the Dragon King. Half asleep and half awake, he arrived at the palace. There were a lot of fish, and the plate on the tower gate was inscribed with the name of the palace, "Ryūgū". Large fish formed in a line and greeted Oto-himé. "A stranger must have cajoled our princess," said a lobster. "He is a beau, like the Kabuki actor Ichikawa Komazō," said a fish.

"Oh, I am quite embarrassed! I am Oto-himé, the sea-god's daughter. You are such a handsome man that I transformed myself into a turtle to be caught by you. Please stay in the sea, and live with me till parted by death," she said, and introduced him to her father, Hachidai Ryūō, or the Dragon King, who then entertained Urashima as the bridegroom with all sorts of delicacies. The palace was as gorgeous as Kikenjō Castle where Taishakuten, or Sakra Devānam Indra, usually resides. "It is too heartless of you to boil me," said an octopus. "Will you come near us, our honoured guest? There aren't special dishes except fishes, but the chef will boil a speaking octopus for you. We hope the bride and bridegroom are firmly united in mutual love forever," said the Dragon King.

Later, on a fine day, Oto-himé guided Urashima out of the water onto an

island, where they enjoyed drinking. Then dozens of people came out of the sea and landed on the island. They began to talk among themselves. Though stark naked, they were exactly like human beings in outward appearance. When they saw saké, they were astonished. As they came near, looking with wistful eyes, Urashima treated them all to a drink. They were delighted beyond measure, and gave him textiles that looked like fine silk as tokens of gratitude.

Urashima stayed in Ryūgū for three years, but began to feel homesick. So he expressed a strong wish to return home for a short time and then later come back to Ryūgū. "Please come back again," said Oto-himé. She gave him two caskets, telling him never to open them. Urashima felt her behaviour to be that of an annoying widow.

After taking leave of her, Urashima carried the two caskets on his back, rode on a big turtle, and returned to his birthplace in an instant. It is written in Hakubutsu-shi (Natural History) that all sides in heaven and earth are connected by seawater, and that the earth is in it. It was in the reign of the twenty-second Emperor Yūryaku that Urashima went to Ryūgū, and in the reign of the fifty-third Emperor Jun'na that he returned to this world. In the meantime three hundred and forty-eight years had passed.

Back in his old home, while worshiping a local deity, Urashima encountered a beautiful woman named Nyoi-himé who was in fact the very image of his old self. Urashima proceeded to fall in love with her. The young lady was also charmed by Urashima as he was a handsome man, and gave him a comb, saying, "If I were not a candidate for queenship, I would

sleep with you. Could you wait for a little?" As for Urashima, he gave her one of the two caskets which he brought from Ryūgū.

Now, his birthplace was not what it had been. Urashima asked an old man nearby in surprise, to which he replied, "There was once a man called Mizunoé-no-Urashima, who went to the sea and never came back. So they say. It was about three hundred and fifty years ago." Urashima was amazed, and wanted to ask Oto-himé about the truth, but could not find his way back to Ryūgū. Not knowing what to do, he opened the casket which Oto-himé had given him. Instantly a purple trail of smoke rose from the casket. Urashima turned into an old man and immediately died. They say it was the first year of the Tenchō era.

Nyoi-himé, who became queen, later entered a Buddhist convent. It is believed that Kukai, a noted priest in the Heian period, obtained the casket which the queen had received from Urashima. According to Genkō Shyakusho, this was called Shiunkyō and had been a treasure at Ryūgū. It is recorded in Shosha Ichiran that Urashima has been deified as Amino-daimyōjin for this strange event.

(2016.12.16 取立)

謝話：糸井文庫の閲覧ながら本稿への掲載を許可した舞鶴市（謝意を表します）
†。舞鶴市・立命館大学トーレ・リサーチセイターベン DB 謳意に伴い、立命
館大学教授・赤間亮氏（謝意を表します）。
<http://www.arc.ritsumei.ac.jp/archive01/theater/html/maiduru/index.htm>
(2016年11月最終確認)。英文を校閲した舞鶴市議会等議事録・学校非常勤講師
ダグラス・ランバード（謝意を表します）。

MIZUNOÉ-NO-URASHIMA: TSUI-NO-TAMATEBAKO

Eriko HATA, Yoshitaka ARAKAWA, Yuki NISHINO, Tomoko KOMURO and Ken'ichi YOSHINO

ABSTRACT : This article comprises a reprint of *Mizunoé-no-Urashima: Tsui-no-Tamatebako* in the possession of Itoi Bunko [Itoi Library] in Maizuru

City, with notes, an abridged modern Japanese version, and its English translation. We hope this will be helpful to researchers both at home and abroad.

Key Words : *Itoi Bunko, Ureshima legends, Kuro-hon, Ao-hon*